

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：12102
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2018～2020
課題番号：18K02519
研究課題名(和文) コミュニケーションツールとなる作陶を活用した教育プログラムを評価する方法の研究

研究課題名(英文) A research on evaluation methods for educational programs using pottery making as a communication tool

研究代表者
齋藤 敏寿 (SAITO, Toshiju)

筑波大学・芸術系・准教授

研究者番号：70361326
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：コミュニケーションツールとなる作陶方法を活用した教育プログラムを実践した。社会の現場で実験的なプロジェクトを実践し、人と人を繋ぐワークショップを企画運営しその効果を評価する方法を構築した。実践的なワークショップを学生が実施することで、今後の高齢化社会等に対応できる問題解決能力を備えた人材の育成を目的とした教育プログラムを構築し、その教育効果を評価する方法を研究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の高度に発達した情報化社会の中で、手を動かしてモノを創造する重要性が再認識されてきた。しかし重要性の根拠や教育プログラムなどの実践効果の論証とそのプログラムおよび教育効果の評価方法は確立されておらず、本研究はコミュニケーションツールとなる作陶方法を活用した教育プログラムを構築し、社会の現場で実験的なプロジェクトを実践し、人と人を繋ぐワークショップを企画運営しその効果と教育プログラムを評価する方法を構築した。

研究成果の概要(英文)：We have practiced an educational program which uses pottery making as a communication tool. We have tested a experimental project in the social field, planned workshops to connect people with each other, and built a method to evaluate the effects of the programs. By having students work in practical workshops, we constructed an educational program aimed to develop human resources with problem-solving skills who can cope with the aging society and other issues in the future, and studied methods for evaluating the educational effects of the program.

研究分野：陶磁

キーワード：陶磁 作陶 コミュニケーションツール 教育プログラム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現代の高度に発達した情報化社会の中で、手を動かしてモノを創造する重要性が再認識されてきた。しかし重要性の根拠や教育プログラムなどの実践効果の論証とそのプログラムおよび教育効果の評価方法は確立されていない。社会の現場で活用できる実践的な教育プログラムの研究と問題解決型人材の育成は大学教育の使命であり、地域のリーダーや指導者など専門的知識を持たない人でも実施することが可能となる教材テキストの開発も重要であった。地域社会の現場で学生がプロジェクトを企画運営し実践体験からの学びを経験させることで創造性と問題解決能力を備えた今後の現代社会に貢献できる人材を育成し、教育プログラム開発と教育効果を評価する方法の研究課題があった。

2. 研究の目的

- 1) コミュニケーションツールとなる作陶方法を活用したプログラムを評価する方法の研究
- 2) 問題解決能力を備えた人材を育成する教育プログラムの教育効果を評価する方法の確立

3. 研究の方法

1. 作陶工程を活用して、人と人を繋ぐワークショップの実施と実践効果を評価し分析する。
2. 社会の現場で実験的な教育プロジェクトを実践し教育効果を評価し分析する。

4. 研究成果

だれもが参加可能なコミュニケーションツールとなる作陶を活用した教育プログラムとは何か定義し、教育プログラムの教育効果と問題点等を把握した。

単なる表現にとどまらないコミュニケーションツールとなる作陶を活用した教育プログラムを開発し運用したことで自己の顕在化、実社会と繋がるための問題点の把握と解決方法の提示ができた。21世紀に求められる教養を持った市民像への提案となった。また独創的な教育プログラムを開発し実施したことで、ものづくりから得られる重要性の根拠や教育プログラムの実践効果が得られた。

4-1 教育プログラム事例「結の器プロジェクト」

「結の器プロジェクト」2018年～2020年では、つくば市民・福島第一原発事故による避難市民・大学生が緩やかにつながるために、協働で作陶ワークショップの企画運営を行う教育プロジェクトを実施した。



結の器ワークショップ (2019年)



植木鉢制作の説明を行う筆者 (2018年)



関彰商事社員研修、「結の器WS」(2018年)

4-2 教育プログラム事例「植木鉢プロジェクト」

「植木鉢プロジェクト」2018年～2020年自由学園幼児生活団幼稚園の協力を得て、美術系大学生が6歳児に植木鉢制作を指導する教育プロジェクトを実施した。

4-3 教育プログラム事例「関彰商事社員研修」

「関彰商事社員研修、焼き物座談会」では、社員研修の場を通じて、コミュニケーションツールとなる作陶ワークショップの企画運営を行う教育プロジェクトを実施した。



自由学園みらいかん「結の器WS」(2019年)



関彰商事ギャラリースタジオ'S展示風景



関連ワークショップ風景

4-4 教育プログラム事例「自由学園みらいかん」

結の器プロジェクトの汎用性を検証するため外部機関：自由学園みらいかんにて「結の器ワークショップ」を開催した。対象は3～6歳児と親子で参加、作成した器で食事会も開催した。

4-5 「教育プログラム成果展」の開催

「結の器プロジェクト展 2013～2019」展を関彰商事本社ギャラリースタジオ 'S にて開催した。

2013年から実施してきた結の器プロジェクトを紹介する展覧会を企画運営し、関連WSを開催した。

会期：2020年2月4日～2月20日関連ワークショップ実施日 2020年2月11日 14:00～16:00

「なまうつわくんストラップ」を作ろう

4-6 教育プログラム事例「新型コロナ禍でのWS」

2020年度は新型コロナ禍で対面でのWSを実施できない状況下であった。コミュニケーションツールとなる作陶ワークショップの企画運営を実施する教育プロジェクトとは何かを再検討する状況下となり、リモートによる運営方法の開発（デジタル媒体とアナログ媒体の融合）が課題とテーマになった。実材（粘土等）を参加者に送付し、zoomソフト等を活用し、作陶工程の動画作成、WS当日のライブ配信などを企画し実施した。この試みは「結の器プロジェクト」「植木鉢制作プロジェクト」ともに実践したことによる今後への課題と可能性を見出すことができた。



Zoomを使用した「2020 結の器WS」風景



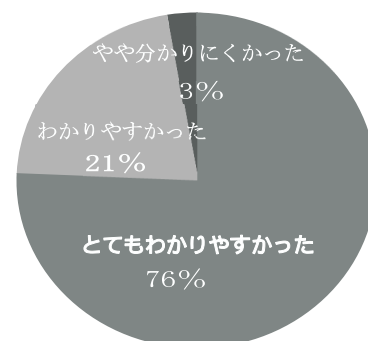
Zoomを使用した「2020 植木鉢制作指導」

教育プログラム効果と評価

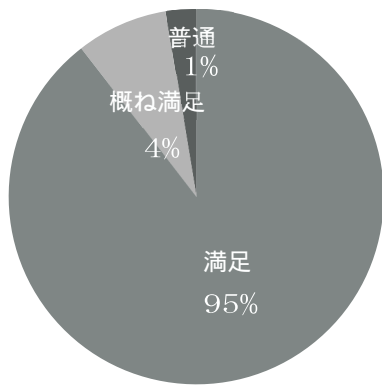
コミュニケーションツールとなる作陶を活用した教育プログラムの実践は上記に示した通り様々な対象者に対し有効であることが確認され教育プログラムとしての有効性が確認された。教育プログラムに参加した学生に対する教育効果を検証する為のアンケート調査や、WS参加者に対する作陶を活用したコミュニケーション効果を評価する為のアンケート調査を実施し、WSの評価と教育プログラムの教育効果を評価する方法の方針が本研究で確認できた。「結の器プロジェクト」等で、教育効果とWSによるコミュニケーション効果を計るアンケートを試作し、実施したことで今後の研究を進める上で有効である為、以下にアンケート結果（抜粋）を示し、研究報告書のまとめとする。

結の器WSアンケートを行う目的

- ・WSの効果の評価
- ・持続可能な人間関係の構築が達成されたかの評価
- ・コミュニケーションが円滑に行われたか評価
- ・プロジェクトの質を更に高めるための評価
(アンケート内容)
- ・広報による本プロジェクトの評価
- ・WSを評価しプロジェクトの効果を評価



WSの評価結果について



WSの満足度

作業工程のわかりやすさ汎用性について

(自由記述抜粋)

- ・複数の方々との合作の面白さ、作業を参加者全員でする作業工程が楽しかった。
- ・席を移動して全員と交流できたところ。色々なグループの作品に参加できたところが楽しかった。
- ・福島の被災の方から震災のお話が聞けて考えさせられた。

(作業工程=コミュニケーション活性化)

- ・誰にでも伝わりやすい 汎用性が高い。

WS 効果の評価

WS の作業工程の理解度の高さ=作陶を通じて交流するシステムが活かされた。(作業工程=コミュニケーション活性化) 誰にでも伝わりやすい 汎用性が高い。

WS の満足度の高さ=コミュニケーションと作陶を同時に楽しむことができる。コミュニケーションが活発・円滑に行われた。以上の事から、結の器WSが、コミュニケーションを円滑化、活性化することのできるプロジェクトとして機能し、誰にでも理解しやすく親しみやすい内容であり、「コミュニケーションツールとしての作陶方法」として汎用性が高いと評価できる。

プロジェクト参加学生へのアンケートと報告書からの教育プログラムの教育効果と評価

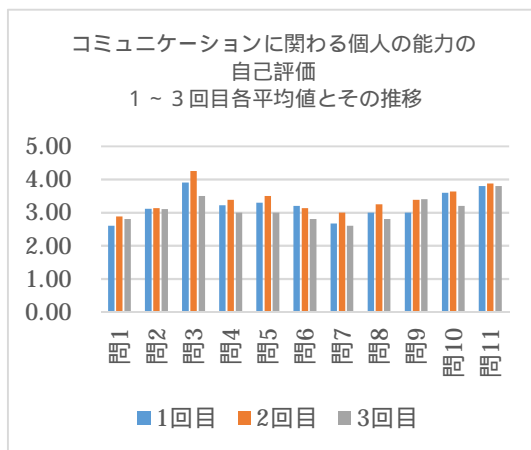
【自己評価アンケート実施の時期】

プロジェクト始動時(4月)中間報告会后(7月)WS実施後(12月)の3回を比較する。

【目的】

- ・実社会の現場で活かすことのできるコミュニケーション能力が身につくプログラムか
- ・実社会で活かすことのできる創造性、問題解決能力が高まるプログラムか
- ・個人の能力(個性)を再認識し、それを活かす能力の改善効果が得られたか

実施結果



- | | |
|----------------|---------------|
| 1. 企画力 | 2. 運営力 |
| 3. 他者と協力する力 | 4. 議論する力 |
| 5. 課題を発見する力 | 6. 問題を解決する力 |
| 7. 交渉力 | 8. 発表プレゼンをする力 |
| 9. 情報を伝達、共有する力 | |

(学生個人において各能力が向上したと感ずるかどうかを「1～5、わからない」の6段階で評価。) 定量化アンケートによると学生自身による個人の自己評価と能力改善の評価は本番直後が最も低いという結果がでた。このことは教育プログラムを通じて自身の能力を再認識し、厳しく自己評価を行えた結果であり、この事はプロジェクトが有効である事の評価として貴重な結果であると考えられる。

【項目以外にプロジェクト運営を通して得ることができた能力(自由記述)】

- ・チーム全体を俯瞰し、サポートが必要かを捉える力
- ・他者と意識を共有するコミュニケーション能力

- ・他人に協力を求める力、自主的に行動する力
- ・行動量と得られる経験量が比例している
- ・今まで苦手だと思い込んでいたことから踏み出すきっかけになった事が得たことです。人前で発言すること、人に指示を出すこと、自分以外の人と仕事を進めること、どれも私にとっては大きなハードルで、なるべく避けてきたことが、問題に直面し解決することで少しずつ自分が変化しました。

自主性の向上について

- ・陶磁の専門知識と結の経験を活かし状況に合わせて必要なことを的確に捉え、行動できた。
- ・結チームの指針がぶれないようWS内容の方向性を調整した。メンバーと協力し、WS運営のための問題を解決できるよう努めることができた。
- ・予想外の出来事にも臨機応変に対応し積極的に動くことができた。
- ・メンバーの動向から、自分の力をどのように活かせばよいか積極的に考え行動した。

プロジェクトの教育効果

自由記述（質問の定性化）により参加者、学生それぞれからプロジェクトの効果に対する様々な意見を集め、プログラムの教育効果を考察する事が出来た。しかし一方で回答を「定量化」出来る質問内容の検討や、図式化しにくいいため教育プロジェクトの効果を客観的に評価することの難しさも明らかになった。また定量化された質問であっても、質問が抽象的であり回答する側のとらえ方、或いは精神状態により回答の質にばらつきもおこることも顕在化した。

本プロジェクトは、毎年異なる学生によって運営され開催の回ごとに参加者が変化するという特徴を持つ。教育プロジェクト効果を評価する基準の制定や、教育プロジェクトの狙いコンセプトが回答者側に伝わりやすい質問内容とアンケート構成を常に改善し検討することが必須である。教育プロジェクトの効果が持続性を持つものであるかを評価し、プロジェクト参加学生、WS参加者との継続的なコミュニケーションの意味を兼ね、アフターフォローとして事後アンケートを実施する。プログラム評価を考察し、プログラム改善と実施方法を常に検討する重要性が明らかとなった。

コミュニケーションツールとして作陶を活用した教育プログラムの評価と今後の課題

2013年～2020年までの本プロジェクトの主活動は東日本大震災及び福島第一原発事故によりつくば市などに移住した方々につくば市民に向けた学生主導の結の器ワークショップの企画運営である。その教育プログラムを2018年度は「関彰商事社員研修、焼き物座談会」、「自由学園みらいかん」事例4-3,4-4を通じて外部機関においても有効な教育プログラムであると評価することが出来た。本プログラムが授業運営の中で行われている現状を踏まえ、継続を構築できる方法も視野に入れたい。継続していく上で、「プロジェクトの自主運営化」、「プロジェクトを広く社会に浸透させるための、教育プログラムのパッケージ化」の可能性が本研究で構築できた。特にプロジェクトの教育効果の質を落とさず、プロジェクト趣旨の一貫性を保ち、他の教育機関、或いは一般社会でもプロジェクトの企画運営を可能となる本研究から得られた教育プロジェクト評価を指針にプログラムを「自主運営化」し、その方法をパッケージ化することができれば、それがプロジェクト普及にとって有効に機能する可能性が確認された。プロジェクトの趣旨である「異なる立場の人同士の繋がり、コミュニケーション」をキーワードとして、その方法と教育プロジェクトとしての教育効果を評価できたことが最大の成果である。

研究成果冊子等

「作陶ガイドブック・STAY HOME with TOU」

齋藤敏寿, 発行: 筑波大学芸術系齋藤敏寿研究室, pp.01-15, 2020

「2020 結の器フォトブック」齋藤敏寿, 発行: 筑波大学芸術系齋藤敏寿研究室, pp.01-32, 2020

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

結の器プロジェクト2020 https://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/toshijulab/lab/project/detail/結の器プロジェクト2020?cat=2016 結の器プロジェクト 2019 https://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/toshijulab/lab/project/detail/%e7%b5%90%e3%81%ae%e5%99%a8%e3%83%97%e3%83%ad%e3%82%b8%e3%82%a7%e3%82%af%e3%83%882019?cat=2016 結の器プロジェクトin自由学園みらい館 https://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/toshijulab/lab/project/detail/ 植木鉢プロジェクト2019 https://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/toshijulab/lab/project/detail/%e6%a4%8d%e6%9c%a8%e9%89%a2%e3%83%97%e3%83%ad%e3%82%b8%e3%82%a7%e3%82%af%e3%83%882019?cat=2016 結の器プロジェクト展2013~2019 https://sekishostudios.jp/event/1582/ 結の器プロジェクト公式HP https://yui-utsuwa.jimdoofree.com/ やきもの談話会2018 https://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/toshijulab/lab/project/detail/%E3%82%84%E3%81%8D%E3%82%82%E3%81%AE%E8%AB%87%E8%A9%B1%E4%BC%9A2018?cat=2016 植木鉢プロジェクト2018 https://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/toshijulab/lab/project/detail/%E6%A4%8D%E6%9C%A8%E9%89%A2%E3%83%97%e3%83%AD%e3%82%B8%e3%82%A7%e3%82%AF%e3%83%882018?cat=2016
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関